ともに生きる地域ってなんだろう？

アスリートインタビュー

ブラインドマラソン選手　近藤寛子さん

見えなくても、スポーツの楽しみは無限大

視野が徐々にせばまり失明する病気を発症し、視力を失った近藤寛子さん。走ることならわたしにもできる！と思い、始めたブラインドマラソン（視覚障害者マラソン）で、2016年リオ・パラリンピック５位入賞を果たされました。滋賀県出身の近藤寛子さんに、ブラインドマラソンの楽しさなどについてインタビューしました。

～ブラインドマラソンとは？～
通常のマラソンと同じように、長い距離を走ってタイムを競いますが、ガイドランナーという役割の人がいて、目が見えない人と一緒に走ります。

Q ブラインドマラソンの特徴を教えてください。

A 一緒に走ってくれるガイドランナーが、“きずな”と呼ばれる１本のロープを輪にしたものを一緒に持って走ることが特徴的です。ガイドランナーはわたしたちの目の代わりに段差やカーブなどを教えてくれます。

“きずな”

Q ブラインドマラソンの面白いところを教えてください。

A ジョギングで自然の中を走っている時にガイドランナーが景色を教えてくれます。わたしたちは見えていないんですけれども、その景色を話してくれることで、景色を感じたり風を感じたりしながら走ることができます。競技として走る時もわたしたちは一人ではありません。ガイドランナーと一緒にゴールを目指すという楽しさがあり、苦しみ半分、喜び２倍ということをとてもうれしく思っています。

～近藤さんからのメッセージ～

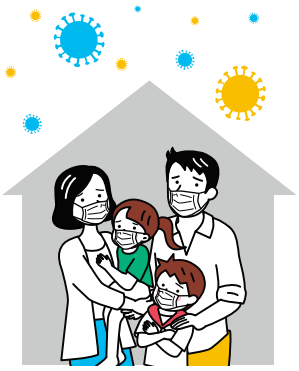
わたしの好きな言葉の中に「失ったものを数えて悔やんでいくよりも、今あるものを最大限に活かしていく」というものがあります。これは障害のある人もない人もみんなに言えることだと思います。苦手なことや出来ないこと、小さなことにクヨクヨするよりも、今、自分ができること、得意なことをどんどん取り組んでやっていくことは本当に素敵なことだなって思います。

動画で学習
「スポーツの楽しみは無限大」

字幕・手話つき

新型コロナウイルス感染症で みんなの暮らしが変わりました

2019年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、発生当初感染の仕組みが不明だったことや、未知のウイルスであったために、ワクチン開発も進まず多くの人を不安にさせました。ウイルスは主に感染者のくしゃみやせき、つばなどの飛沫、また接触により広がるため、人々の活動は大きく制限されることになりました。集団感染を防ぐために外出を控えるよう呼びかけられたことで、会社やお店が休業になったり営業時間が短くなったりし、失業や収入が減少する人が増えました。



コロナ禍で経験したこと

●緊急事態宣言により学校が休校。自宅待機に

- 友達とも会えない、学校行事も中止になり、ともに活動する学びの機会が少なくなった。
- 常にマスクをしているから表情がわからず、お互いの気持ちが伝わりにくくなった。
- 外出が制限され、学校や地域で体験できることが減ってしまった。
- 子ども一人だけで家で過ごすことが増え、孤独・不安になった。

●感染者や医療従事者に対する差別や人権侵害

- 感染者に対する誹謗・中傷、医療現場で働く人に対する差別。

●感染や自粛生活がもたらす心への影響

- 感染により大切な命が奪われることの悲しみなど。

詳しく知ろう ➡

子どもたちの笑顔を増やすための暮らし・遊び・学びの指標

『すまいる・あくしょん』

コロナ禍の子どもの声から生まれた、子どもの笑顔を増やすためにみんなが取り組める行動や方法、条件などを示した『すまいる・あくしょん』。**『子どもが自分自身のために行動できること』『子どもが必要としていることに対して大人が行動すること』**という２つの視点から、７つの行動指標（あくしょん）を策定しました。

みんなでできることを考えて、一人ひとりが行動しましょう。